

# 日本語の和らげ表現について

——『試論』の諸問題——

三 好 準 之 助

## 目次

1. 『日本語の和らげ表現 一語用論的試論一』の構成
  - 1.1. 第1章「言語の和らげ表現」について
  - 1.2. 第2章「日本とは？」について
  - 1.3. 第3章「日本語の和らげ表現」について
2. 日本語の和らげ表現手段について
  - 2.1. ほんやり型
  - 2.2. 遠回り型
  - 2.3. 隠れみの型
3. 拙著の説明原理の検証
  - 3.1. ポライトネス関連の研究について
    - 3.1.1. ポライトネスの普遍性について
    - 3.1.2. 発話の姿勢について
    - 3.1.3. 発話行動の協調について
  - 3.2. 社会構造の特徴と和らげ表現
    - 3.2.1. 中根理論について
    - 3.2.2. 相手中心主義の解釈
    - 3.2.3. ウチとソトについて
  - 3.3. 日本語のポライトネス研究について
    - 3.3.1. 配慮表現について
    - 3.3.2. 和らげ表現に関連した研究のいくつか
    - 3.3.3. 言語行動と和らげ表現
4. 和らげ表現研究の今後

キーワード：語用論，ポライトネス，和らげ表現，日本語，配慮言語行動

筆者は本年（2012）6月，ドイツの出版社から *La atenuación del japonés —un ensayo pragmalingüístico—* 『日本語の和らげ表現—語用論的試論—』を出版した（Miyoshi, 2012b）。日本語や日本文化に関心を持っている世界のスペイン語話者が，日本語の仕組みの一端を，スペイン語で読んで理解できるように，一部にはスペイン語との対照を含めてスペイン語で書かれた小冊子である。現代日本語のいくつかの言語的特徴を，社会系語用論による言語表現の分析手法のひとつである「和らげ表現」（スペイン語では *atenuación*）という観点から分析した。

筆者はスペイン語学の研究者である。スペイン語の特徴を論じるために，スペイン語の学界で注目されている和らげ表現という説明原理が有効であると判断し，その研究史を概観し

て実際の言語現象に適用する試論「スペイン語の和らげ表現について」を発表した（三好, 2012a）。上記の著書はこの視点を使って日本語を分析する試みである。

意外な形でドイツから著書執筆の誘いがきた。出版社の関係者が、ベネズエラのロスアンデス大学の雑誌に発表した筆者の短い評論の「日本語における和らげ表現」を目にしたようである。昨年（2011）の夏、このテーマでモノグラフを書いてみないかという連絡が入った。そこで、それまでに記録してきたノートを使って書いてみることにした。

本稿はこの拙著の構成を概観し、和らげ表現という視点から現代の日本語（おもに口語）のそれに関連する表現形式を分析した様子を紹介する。あわせて、著書で活用したいいくつかの作業仮説について、日本で公表されてきた関連資料のいくつかとの関わり具合を検討し、今後の研究の方向を探らうとするものである。

## 1. 『日本語の和らげ表現—語用論的試論—』の構成

*La atenuación del japonés —un ensayo pragmatolingüístico—* は本文が3章で構成されている。それに注意書き<sup>1)</sup>と序文、および結びと参考文献表と簡単な日本語の語彙集を加えた。本体の3章は以下のような構成になっている。

### 第1章 言語の和らげ表現 (La atenuación lingüística)

- 1.1. 語用論 (Pragmática)
- 1.2. ことばの和らげ表現 (La atenuación verbal)
- 1.3. 本書の分析モデル (Nuestro modelo analizador)

### 第2章 日本とは？ (¿Cómo es Japón?)

- 2.1. 現代の日本の様相 (La fisonomía actual de Japón)
- 2.2. 日本の略史 (Breve historia de Japón)
- 2.3. 日本社会の4種類の局面 (Cuatro aspectos de la sociedad japonesa)

### 第3章 日本語の和らげ表現 (La atenuación japonesa)

- 3.1. 3種類の社会文化的特徴 (Tres particularidades socioculturales)
- 3.2. 和らげ表現と日本語の3種類の特質 (La atenuación y tres cualidades del japonés)
- 3.3. 日本語の和らげ表現手段 (Atenuantes del japonés)

#### 1.1. 第1章「言語の和らげ表現」について

一般の読者を対象にしているので、まず語用論の基本概念を Escandell Vidal の説明方法に従って述べ、認知系語用論と社会系語用論の区別を説明した。和らげ表現は社会系語用論で扱われる。そして語用論のなかで和らげ表現が属している範疇のポライトネスについて略述した。

つぎに三好(2012a)に基づいて、スペイン語学の分野で開発されてきた語用論概念である和らげ表現の基本を略述した。今回はそれに Claudia Caffi の理論を追加して活用することにした。「和らげ表現手段」として Caffi の用語をそのまま採用し、つぎの3種類のタイプを提示した。そしてそれに従って日本語の和らげ表現を論じることにした。

A. Matorral (ぼんやり型) : 文の命題内容の明確さを何らかの表現手段によって弱め、その意味内容の輪郭を曖昧にするタイプである。スペイン語では代表的な手段として接尾辞のなかの示小辞(縮小辞)、副詞の *más o menos* 「多少、多かれ少なかれ」や *un poco* 「少し、ちょっと」、前置詞の *como* 「～ほど」などがある。

B. Rodeo (遠回し型) : 発話者が発話行為に関する主役としての姿勢を弱めるタイプの表現手段である。Digo ~ 「(動詞時制の直説法現在) 私は～と言う」の代わりに Yo diría ~ 「(直説法過去未来) 私なら～と言うだろう」、Calculo que ~ 「私は～と計算する」の代わりに Según mi cálculo ~ 「私の計算によれば～」、Es bueno ~ 「～はよい」の代わりに Me parece / Creo que es bueno ~ 「～はよいと思われる・思う」などである。

C. Amparo (隠れみの型) : この表現手段は発話行為自身の強さを弱める。話し手や話し相手の存在を隠してしまう表現のことである。すなわち、発話文の述語動詞が三人称になるような表現であり、さらに行為者の表現が避けられる。上記のぼんやり型や遠回し型には定型の語句が指定できるが、この隠れみの型の表現手段は文単位のものとなり、スペイン語なら無人称表現や天然現象の表現(文法上の主語が不要)が含まれる。

## 1.2. 第2章「日本とは？」について

和らげ表現とは、語用論で扱われるポライトネスの表現手段のひとつであるが、筆者の基本的な理解では、語用論のなかで認知系より社会系のほうに大きくかかわっている。それゆえ、スペイン語圏の一般読者に向かって日本語の和らげ表現を論じるには、まず、その前提条件ともいえる日本社会の在り方を説明しなくてはならない。筆者はそれを「4種類の局面」として捉えた。この捉え方については、多くを社会人類学者の中根千枝(1967, 1978, 1995)に負っている。

まず、日本文化の「均質性」(homogeneidad)である。その背景を説明するために、日本史の概略を紹介し、その2千年以上の歴史における文化的均質性の成立の動機を示した。稲作を基本にする村落共同体の共同作業もそのひとつである。さらに、アジア大陸から離れた島国であることが外来民族の侵入を阻止してくれたこと、日本文化の社会構造の均質化の動機の大きな部分を形成した江戸時代の鎖国政策と参勤交代である。筆者はこの均質性が、日本語の言語表現の特徴となる和らげ表現の、その表現手段のなかの隠れみの型に結びついている、という解釈をする。日本社会の残りの3種類の局面は、日本の歴史的な社会構造の特徴である。

ひとつは日本人の個体認識としての社会的最小単位である。それは個人ではなく、いくつか

の特徴を備えた小集団である。この認識方法はよく集団主義と呼ばれるが、単なる個人の集まりの意味で集団主義という術語を採用すると、中根の定義が見えなくなってしまうので、筆者はそれを「グルピスモ」(grupismo)と呼ぶことにする。中根は次のように定義している。「一定の個人からなる社会集団の構成の要因は、きわめて抽象的にとらえると、二つの異なる原理—資格と場—が設定できる。すなわち、集団構成の第一条件が、それを構成する個人の『資格』の共通性にあるものと、『場』の共有によるものである。ここで資格とよぶものは、普通使われている意味より、ずっと広く、社会的個人の一定の属性をあらわすものである。[…]『場による』というのは、一定の地域とか、所属機関などのように、資格の相違を問わず、一定の枠によって、一定の個人が集団を構成している場合をさす」(1967: 26-7)。そして資格の異なる者たちを同一集団成員として認識させるためには、外部的には外にある同様の小集団との対抗意識があるが、「内部的には『同じグループ成員』という情的な結びつきをもつことである。資格の差別は理性的なものであるから、それを越えるために感情的なアプローチが行われる。この感情的アプローチを招来するものは、たえざる人間接触であ」という(1967: 37)。中根はさらに(1978: 21)「日本人にとっての個体認識としての社会学的単位は、欧米人のように個人ではなく、たしかに集団であるが、無限定の集団ではない。それは、社会学の用語でいうプライマリー・グループ(第一義集団)とよばれるものに近い。すなわち、常に(ほとんど毎日)顔を合わせ、仕事や生活を共にする人々からなる小集団である。[…]とくに伝統的な農村における『家』はその典型的な例である」。普通、集団主義と呼ばれる人間集団は、資格の共通性で集められた人の集団も一定の生活の枠でくくられた人の集団も指してしまうが、筆者が日本社会の特徴のひとつとするのは生活の場(枠)でくくられる人たちの集団のことであるので、その区別をするためにグルピスモという用語を使用するのである。グルピスモは当然、よく言われるウチとソトの違いと直接的に関係し、ウチと呼ばれる人間集団を指している。その構成員たちは日ごろから絶え間のない安定した接触によって互いの結びつきを確認しているが、それによって日常生活にかかわる情報を共有しているために、互いのコミュニケーションのためには明確な概念の言語表現を必要としない。和らげ表現が歓迎される所以である。

筆者はさらに、グルピスモを形成する小集団の「場」(あるいは枠)には、親密度の大小があること(家庭のようないつも接している構成員からなる小集団から、たまたま講演会などで同席する束の間の小集団まで)と、われわれ日本人は日々の生活でさまざまな小集団(家庭、親族会、町内会的な集まり、学校や職場のさまざまな小集団、同窓会、趣味の集まり、音楽会、講演会など)に属していることを確認しておく。

日本社会の特徴的の局面の残りの2種類は、このグルピスモの内部に観察されるものである。ひとつは話し手の自己規定の問題である。グルピスモは人間社会の最小単位であるから、その構成員は個人単位の社会的な権利や責任について希薄な意識しか持たなくなる。小集団の内部

で互いに支えあって生活していて、互いに自己主張を控えることになる。筆者はこのような性格が、鈴木孝夫のいう「相手依存の自己規定」と関連づけられると考えている。鈴木(1973: 197)は日本語の人称代名詞の用法を分析した結果、「相手が誰であろうと、相手が不在であろうと、先ず自己を話し手つまり能動的言語使用者として規定するインド・ヨーロッパ語などの、全体的自己規定と比較して、日本人の日本語による自己規定が、相対的で対象依存的な性格を持っている」と主張している。筆者はこのような日本社会の特徴的的局面を「相手中心主義」(alocentrismo)と呼ぶことにした。これは和らげ表現では話し手の主張を和らげる遠回り型の手段に関係している。

さらに、このグルピスモの単位となる小集団のなかでは、構成員たちの間に社会的な位置の上下関係がみられることである。もちろんその小集団の構成員たちの中にはヨコの関係でつながれている者たちもいる。支配的なのは上下の関係だ、ということである<sup>2)</sup>。この「日本のあらゆる社会集団に共通した構造」を、中根は「タテ」の組織と呼んでいる(1967: 70)。典型的な小集団である家族を見ればよくわかる。第二次大戦以降は薄れてしまったが、それ以前には親子の間や夫婦の間、あるいは兄弟の間に上下関係が存在していた。子は親に、妻は夫に、弟は兄に敬語を使って話しかけたものである。社会的には支配階層の家庭であろう。ということは、それと共存する形で被支配階層の存在も考慮しなくてはならないが、そこでは上下関係よりもヨコの関係が支配的であったであろう。筆者はこの上下関係を、中根にならってタテ型体系(verticalismo)と呼ぶことにした。

### 1.3. 第3章「日本語の和らげ表現」について

この章では、まず(3.1)、和らげ表現と関連する「3種類の社会文化的特徴」を紹介した。小さきものへの社会的な高い評価(李御寧が指摘する社会的現象のいくつか)、きっぱりとした切斷の回避(ホンネとタテマエ、ウチとソト、贈り物文化)、察しの文化(発話行為の回避、間接表現行為、和らげ表現)である。これらはすべて、日本文化の4種類の特徴的な局面(文化の均質性、グルピスモ、相手中心主義、タテ型体系)と何らかの点で関連付けられることを示した。小さきものへの社会的な評価については、根付コレクションの数奇な運命を紹介したDe Waalの作品が出版されていたので、それとともに根付のことを紹介した。きっぱりとした切斷の回避には3種類の現象を挙げたが、それらの現象の起こる動機には、グルピスモの単位である小集団の構成員間にみられる物理的精神的なつながりの維持への努力があると解釈される。察しの文化の3種類の現象はどれも、日本社会の文化的な均質性に関係している。

つぎに(3.2)、和らげ表現と関連する日本語の、しばしば話題にされる3種類の特徴について述べた。いわゆる人称代名詞の用法、いわゆる敬語の使用に関する特徴、そして動詞の自発態である。日本語の文法解釈に人称代名詞という西欧諸語の概念を当てはめることの妥当性については、意見が分かれているようである。日本語的な文法範疇の概念である敬語について

も、その現代的な定義については様ざまな考え方がある。ところが、敬語という文法範疇を動詞に限らず、広く待遇表現としてとらえれば、この双方の文法概念に関連する表現手段は複雑に重なってくるのである。

日本語の人称代名詞とされている語を西欧諸言語の話者に説明するのは難しい。一人称単数主格の代名詞では、英語の I にスペイン語の yo が対応し、二人称単数主格の代名詞では英語の you にスペイン語の親称の tú と尊称の usted が対応するが、このような対応の仕方をする日本語の語は、厳密には存在しないといえよう。スペイン語の yo や tú は本来的な人称代名詞であるが、日本語の「わたし」や「きみ、あなた」はそうでない。西洋語の観点からは、これらは疑似人称代名詞であるとした。そこには親族名称や呼びかけ語も含まれる。スペイン語にせよ日本語にせよ、それらを相手の言語を使う人に教えるとき、どのように対応させればいいのか。さらに、文脈依存性が高い日本語では、主格の人称代名詞相当語を文面に出さない使い方が一般的である。スペイン語では動詞の活用形で主語が規定されるので、普通は文面に出されない。しかし日本語では発話の広義の文脈情報に依存して主語相当語を示す必要がないことを考えると、文脈情報のない文を使って教えることが普通の文法教育では、そのあたりをどのように考慮すればいいのか。たとえば、疑似人称代名詞と敬語のかかわりであるが、現代日本語の「あなた」の使い方と、スペイン語の tú と usted をどのような日本語に対応させるか、という問題がある。筆者は教室で日本人にスペイン語を教える場合、初級者には便宜上と断りつつ、親称を「きみ」、敬称を「あなた」で教えてきた。代案がないからである。この教授上の課題も今後、何らかの方策を考えなくてはならないであろう。そのような諸点を指摘しておいた。

## 2. 日本語の和らげ表現手段について

第3章の第3節は日本語の和らげ表現の手段を、ぼんやり型・遠回り型・隠れみの型に分類して、それらのいくつかを紹介した。ぼんやり型とは発話内容の語義の概念の境界をぼんやりさせる表現手段であり、遠回り型とは話し手の発話者としての意図を弱めるための表現手段であり、隠れみの型とは発話のなかに話し手・話し相手・行為者が現れるのを避ける表現手段である。

### 2.1. ぼんやり型

和らげ表現のためのぼんやり型の表現手段 (matorrales) として挙げたのは、タブー語とされることばを避けるための婉曲語法 (eufemismo)、少量の意味の原義からさまざまな和らげ表現に使われる副詞の「ちょっと」、ぼんやり型の接辞や造語要素 (小ささの表現のための「こー、ひめー、ーちゃん」、数量指示のための「ーほど、ーばかり、ーくらい」、選択指示の

ための「-でも、-など、-とか、-のほう」などである。いずれも表現語句の語義概念を曖昧にすることで、話し手の主張の程度を弱めている。

スペイン語学の分野では、古くから婉曲語法が和らげ表現手段として研究されてきた。日本語の「ちょっと」に相当する表現手段もいくつか存在するが、とくに前置詞的に使われる como はよく引き合いに出される。とはいえ、「ちょっと」のさまざまな用法（依頼のとき、相手の注意を引くとき、否定するとき、拒否するとき、否定的な評価のとき、など）に対応するスペイン語の表現形については、今後の対照研究の課題となるであろう。スペイン語学におけるぼんやり型の接辞としては、示小辞 (diminutivos) がある。この表現手段は俗ラテン語から活用されていて、かなり研究されてきているが、示小辞とか縮小辞とかの術語は、日本語研究では使われていないようである。筆者は日本語の「小春日和」の「こ」や姫鏡台の「ひめ」などを示小辞として扱っている。スペイン語の示小辞の用法のなかに、指示物に対する話し手の親愛を表現するという用法があるが、まさにそれに相当する日本語の接辞が「-ちゃん」であろう。

選択指示のための造語要素である「-とか」は、現代日本の若者ことばとして多用されているが、それは責任回避の現れである、ということで非難されることもある<sup>3)</sup>。筆者は「-とか」の多用は日本語の根本的な仕組みと関係しているのではないかと解釈している。また、喫茶店などの店員用語として指摘され、評判の悪い「-のほう」も、和らげ表現の仕組みから解釈すれば、その発話意図がある程度理解される。店員の側に「複数のご注文を受けておりますが、まず、~のほうをお持ちしました」という気持ちから、直截的に「~を」というのを避けて、和らげ表現をしているとも解釈できる。

## 2.2. 遠回り型

遠回り型 (rodeos) とは、まず、発話形式である。主題提示の方法（「わたしてきには、わたしなどは」）、文末提示の方法（「-ようだ、-とおもう、-らしい」）、そして文の中断(省略)表現である。遠回り型の2番目として返答の表現手段について解説した。最初は「相づち」である。相づちと呼ばれる応答形式は日本語における発話姿勢に関する根本的に重要な現象ではないかと思われる。ふたりが話をするとき、その話し方に相づちと呼ばれる応答があるということは、ふたりが発話行為を協力しあって成立させている、ということである。西欧の諸言語では、話者とその相手は言語表現の場で対立する関係であるとされていることと、かなり明白な相違を示している。それゆえ、日本語の話者とその相手は、会話 (conversación) をしているのであり、対話 (diálogo) をしているとは考えにくい、という指摘をした<sup>4)</sup>。

つぎに、返答の「はい」とその関連語について述べた。これは相づちにも関係しているが、日本語の「はい」は決して肯定の返事ではない、という点を明示しておいた。相づちの一方である話し相手（脇役、弟子）が話し手（主役、師匠）の指示を受けてそれに応えるときの、話

し手の発話をしっかり聞き取っている、という信号なのである。

また、日本語の話しことばで否定表現が避けられるのも、このあいづちと密接な関係がある。発話行為がふたりの協力で成立しているという前提があるから、話し手の発言に対して否定の返事をするのは、その共同作業の成立を脅かすことになる。このような発話姿勢では、否定の返事をするのが難しくなるのは当然であろう。

そして、その他の遠回り型の表現手段として何種類かの表現を紹介した。招待のための誘いの表現、命令文の回避という現象、常套表現語句の「どうも、おかげさまで、すみません、しつれいします、どうぞ」などである。誘いの表現では、とくに否定疑問文に注目した。日本語では話し相手が拒否する可能性を前提にしたこの丁寧な和らげ表現も、スペイン語（スペインの標準語）では「なぜ否定するのか」という否定文の確認をする疑問文の意味に解釈されやすい。どちらの言語の話者にとっても、よく認識すべき表現形式であろう。

### 2.3. 隠れみの型

ぼんやり型や遠回り型には、上述のように、慣用的な接辞や語句の表現形が存在するが、隠れみの型 (amparos) にはそのような表現形が存在しない。文型そのものが利用される。自発態の文型（「なる、ある、する」）、主題文の文型（「は、が」の用法など）、命令表現の文型などについて解説した。

自発態の文型は、スペイン語話者にも理解しやすい。スペイン語には行為者（主語）を曖昧にする無人称表現があるからである。あるいは三人称単数の動詞のみで文を作る天然現象の意味の動詞もある（「雨が降る」なら *Llueve*. 単一人称動詞とも呼ばれる）。とはいえ、目立って異なる表現の例として、スペイン語の *tener* 「持つ」と日本語の「ある」の違いを示して、スペイン語表現の行為者重視と日本語表現の行為者隠蔽という点における両言語の相違を説明した。

主題文とは日本語の特徴的な副助詞の「は」で構成される文であるが、スペイン語にも補語を文頭に主題として出して、文中にその代名詞を加えるという表現形式があるから、スペイン語話者には理解しやすいのではなかろうか（なお、日本語の「は」は、口語文法では副助詞だが、文語的には係助詞とされてきた）。

## 3. 拙著の説明原理の検証

拙著『日本語の和らげ表現—語用論的試論—』は、スペイン語圏で日本語や日本文化に関心のある一般的読者に向かって、語用論で扱われる「和らげ表現」(atenuación) という発話分析手法を使い、現代日本語の用法のなかの興味深い特徴をいくつか選んで解説したものである。和らげ表現という概念は、語用論のなかで扱われるポライトネスに関連して、発話行動の



メカニズムを解明するためにスペイン語学の分野で研究されてきた分析手段である。この概念を使って現代日本語の特徴的な表現形のいくつかを統一的に分析してみた。また筆者にとって和らげ表現とは、語用論のなかでも特定言語の文化圏に見られる社会的な特徴が関与するとされる社会系語用論のテーマとなることから、日本の社会構造に見られる特徴をいくつか仮説的に提示し、和らげ表現がそれらの特徴と深く関連づけられる様子を指摘した。文化の均質性・グルピスモ・相手中心主義・タテ型体系である。そうすると、これまで語用論とは無関係に指摘されてきた様々な日本語表現が、和らげ表現として統一的に説明することができるようになった。しかしはたして、これらの説明原理には妥当性があるのであろうか。この第3章では、日本でこれまでに発表されてきたいくつかの関連資料を改めて検討しながら、その妥当性に関する検証を試みたい。

### 3.1. ポライトネス関連の研究について

本稿の1.1. でポライトネスという用語が使用されている。ポライトネス研究とは、宇佐美(2008: 15)によれば、「ロビン・レイコフによって語用論的関心事として取り上げられ、リーチによって語用論的『公理』としてまとめられ、B&Lによって、より包括的な理論として体系化されたと言える」。宇佐美はB&L (Brown & Levinson, 1987 など) のポライトネスの概念は「対人配慮行動」というものになろう、としている(2003: 118)。おもに英語文化圏の人たちが提唱し、これまで30年以上にわたって世界中で研究されてきた。

#### 3.1.1. ポライトネスの普遍性についてについて

B&Lのポライトネス理論<sup>5)</sup>は、周知のように、フェイスという直観的概念から出発している<sup>6)</sup>。フェイスには2種類ある。ひとつはネガティブ・フェイスであり、それは縄張り・個人的領分・邪魔されない権利の維持に対する基本的要求であるが、自分の行動を他者から邪魔されたくないという要求、他者から距離を置きたいという姿勢である。もうひとつはポジティブ・フェイスであり、それは相互行為者が求める肯定的で一貫した自己イメージであるが、自分の要求が少なくとも何人かの他者にとって好ましいものであってほしいという欲求、他者との距離を縮めたいという姿勢である。通常、話し手も話し相手もこれらのフェイスを保持したいと思っているが、発話行為には本質的にフェイスを脅かすものがあるが、この「フェイスを脅かす行為 FTA」を減らすための戦略(作戦)があり、それぞれの戦略に従って言語表現が選択される。すなわち、ポライトネス研究とはFTA(フェイスを脅かす行為)を緩和するための作戦とそれを実行するための方策(言語表現)の選択に関する研究である。

宇佐美(2008)はB&Lの理論について、これまでに発表されてきた様々な批判や賛同の研究について概説し、批判の場合には2種類の研究分野の混同が原因であるとする。ひとつはポライトネス記述研究であり、もうひとつはポライトネス理論研究である。宇佐美によれば、

前者の記述研究とは「各個別言語におけるポライトネス、敬語体系や敬語運用の研究、それらの比較文化的研究などであり」、その目的は「様々な文化における多様なポライトネスの実現の記述を深めていくことによって、ポライトネスとは何かということを明らかにする」ことである。そして後者の理論研究は「言語文化によって多岐・多様にわたるポライトネスの『実現 (realization)』の基にある動機と実現された行動の『解釈 (interpretation)』のプロセスを、統一的に説明、解釈、予測しようとする『理論』に重点を置いた研究」であり、その目的は「その多様なポライトネスの実現の基になる『動機』と、対人配慮行動の『解釈』の原則としての『ポライトネスの普遍理論』の構築」である (2008: 13)。実際、「普遍理論追求派が共通して主張していることは、『ポライトネスについての規範、すなわち、いつどのような状況で、誰が誰に対して、どのような言語行動をするべきかということ』は、文化によって様々な多様性を見せるが、話し手が、そのような規範と自分の思考を考慮して、どのような言語行動を選ぶかということの背後にある動機と、実際の言語行動の選択のメカニズムは、普遍的である』ということである。そうであるとするならば、普遍理論追求派の目的は、『ポライトネスの背後にある動機とそれを実現する言語行動のメカニズム』を体系化することにある」(2008: 15-6) (下線は筆者のもの)。彼女自身、ポライトネス理論には普遍性があり、その普遍性を追求するため、ディスコース・ポライトネス理論というものを提案している。

しかしながら筆者は、上記の下線部の「背景にある動機」が普遍的である、という考え方については、ある種の疑問を抱いている。そのような動機には、それぞれの言語文化圏の社会構造に起因する発話姿勢の特徴が関与していないだろうか。筆者は本稿で紹介する拙著において、その関与を当然のものとして日本語の和らげ表現を解説した。この姿勢には明確な理論的背景はない。むしろ筆者の直観的な姿勢である。普遍理論追求派の研究者によって、あるいは宇佐美によって、社会構造に起因する発話姿勢の特徴も理論的に普遍性を帯びた構造に組み立てられるのを待つことにする。

### 3.1.2. 発話の姿勢について

B&Lのポライトネス研究にはフェイスという概念が導入された。筆者は、社会の普通の成人構成員にネガティブ・フェイスとポジティブ・フェイスがあることには、程度の差こそあれ普遍性があると思う。宇佐美 (2008: 7-9) によれば、この術語の概念についても多数の批判がなされてきたという。しかしながら率直に言えば、筆者もグルピスモとの関連で、このフェイスにかかわるFTA (フェイスを脅かす行為) という概念とその回避のためのストラテジーの部分で疑問を感じる。この疑問は、宇佐美 (2008: 7-8) によれば、「個別の言語・文化における固有の『フェイス』の概念を持ち出し、それが文化によって異なるというしごく当然ではあるが、B&Lの理論におけるフェイスの位置づけと役割とは、ほとんど無関係」なものかもしれない。

もう少し具体的に言えば、この疑問の背景は次のようになろう。西欧の個人主義の社会で

は、社会を構成する最小単位は個人であり、個人はそれぞれの社会で認められている個人の権利を主張し、発話のそもそもの行為には全面的な責任を負う。そのような社会では、二人の発話者は互いに対向者として対峙しているのである<sup>7)</sup>。しかし日本は第二次世界大戦以降、社会構造がラジカルに変化してきているとはいえ、依然としてグルピスモの社会であり、その社会の最小単位は小集団である。そして小集団の構成員の間には相手中心主義の考え方が残っている。そこでは同一集団のなかの話し相手とのつながりを不断で安定した接触で維持しようとするし、日本人の会話には「相づち」という言葉で説明される現象がある。これらを考えると、発話が話し相手を脅かす、という点で、FTA という捉え方が日本語にどこまで通用するのだろうか（注6を参照のこと）。小集団のなかの構成員が別の構成員から依頼されたり命令されたりすることで、自分のポジティブ・フェイスを逆に満足させる、という場合もあるのではないだろうか<sup>8)</sup>。

### 3.1.3. 発話行動の協調について

よく知られているように、グライス (Grice 1975) は哲学的論理学の観点から、会話における4種類の協調の原理を発表した。量 (適当な量の情報を提供すること)・質 (真実と思われる情報を提供すること)・関与性 (関係のある情報を提供すること)・様態 (情報を明確な言い方で提供すること)である。B&Lは基本的にGriceの理論を正しいとしているし(1987: 3)、リーチもグライスの原理を語用論の研究の出発点に位置づけている (Leech 1983: 7)。しかし筆者は、協調の原理の質や量について、文化の均質性を背景とする日本語の発話行動とのかかわりに疑問を感じている<sup>9)</sup>。

発話で提供される情報の質については、グライス自身、その原理を無視する言語表現として皮肉・隠喩・緩叙法・誇張法・多義性・曖昧さの存在を指摘している (1998: 49-54)。また、リーチも、語用論的ストラテジーである誇張法や緩叙法は協調の原理に明らかに違反している、と述べている (1983: 145)<sup>10)</sup>。会話において「適切」とされる量や質が個別の言語文化圏で本来的に相違する場合があるのではなからうか。すなわち、発話において提供される情報の質や量が文脈情報への依存度が高い日本語のような言語文化圏では、上記の違反とされる言語表現が協調の原理になっていると考えられる。その場合、グライスの協調の原理の適用の限界が認められるのではないか。

鈴木孝夫 (1975: 188-191) は、日本人の言語観の根底には日本の文化的な均質性があるという。日本人が同質的存在基盤に立っていることで「考え方のしくみ、価値の前提が等しいもの同士が、相手を理解する最良の方法は相互の接触を多くすることである。相手の行動がよって立つ事実、具体的条件を出来るだけ詳しく知れば、半ば自動的に理解が成立することになる。」それゆえ、「このような人間関係では当然のことながら、ことばを使うことが少なく済むことになる。」すなわち、広い意味での文脈情報を当てにすることができるので、「事実が優先し、そして事実頼る社会」になるが、そこでは「ことばという本質的には虚構性の濃厚な伝達

手段の出る幕がない」のであり、「何も言わないのが一番びったりするのである。」日本人は「明らかに事実を理屈に勝るものと考えている」から、「《論より証拠》なのである。ところが、西欧社会ではしばしば《証拠より論》という態度が見られる」が、「これは、万人にとって承服出来る客観的な事実の存在を前提とすることが出来ない、異質の構成員よりなる社会集団が彼らの社会なのだということを考えて、始めて理解できるものである。」

グライスの協調の原理は、このような背景のある西欧社会のなかで考案されたはずである。ということであれば、日本語の語用論の研究では、その大原則たる会話の協調の原理という段階から再確認していく必要があるのではなかろうか<sup>11)</sup>。

### 3.2. 社会構造の特徴と和らげ表現

筆者は日本語の和らげ表現を解説するとき、それを日本の社会的な特徴と関連づけた。採用した4種類の特徴は、日本文化の均質性、グルピスモ、そしてその中で作動する相手中心主義とタテ型体系である。これらの特徴の論拠は主として中根千枝に負っている。

#### 3.2.1. 中根理論について

青木保は1999年に、第二次大戦の戦後からそれまでに出版された日本文化論を4期に分けて論じている(青木1999)。そのなかで中根の理論は、第三期「肯定的特殊性の認識」に属している。青木の要約によれば、中根が発見した日本的社會構造は「日本人の『集団』および『組織』原理における『タテ性』にある」、となるが、「その『タテ性』とは、どこから来るのか。そこにはいくつかの決定要因がみとめられる。この決定要因とは、一、場の強調、二、集団による全面的参加、三、『タテ』組織による人間関係、である」(1999: 90)。「こうした『場』と『集団の一体感』によって生まれた日本の社会集団は、その組織の性格を『親子』関係に擬せられる『タテ』性に求めることになる」(1999: 91)。「この中根『タテ社会』論は、日本社会の『特質』を示すものとして広く日本人一般に歓迎された」(1999: 95)。他方、「中根の立場はベネディクトの立場と大変似ているのである。ベネディクトの影響がむしろ濃厚にみられるとってよい」と解釈している(1999: 96)。

ベネディクトは、おなじく青木によれば「『日本をして日本人の国たらしめているもの』についての『仮定』として、『菊と刀』が日本人に提示し、その後ながく議論の対象となった問題は、二つある。第一に、日本人の社会組織の原理としての『集団主義』である。第二に、日本人の精神態度としての『恥の文化』である」(1999: 50)。そして本論に関係するのはその第1点であるが、この集団主義については、「これも普通いわれるほど本格的に論じられているわけではない。ベネディクトの人類学的立場は、あくまでも『文化分析』にあり、後章で取り上げる中根千枝論文のような、『社会構造』論に発する『集団主義』の分析のようなアプローチはみられない。ただ、『集団主義』としてまとめられるような分析の手がかりを豊富にたえていることは事実であ」と解説している。なるほど『菊と刀』ではその第3章(Taking

One's Proper Station「各々其ノ所ヲ得」)で、まず、階層制度に言及し、「日本の階層制度に対する信頼こそ、人間相互間の関係、ならびに人間と国家との関係に関して日本人の抱いている観念全体の基礎をなすもの」であるという(1967: 53)。この階層制度がタテ型体系につながるのであろう。また、「日本人は誰でもまず家庭の内部で階層制度の習慣を学び、そこで学んだことを経済社会や政治などのもっと広い領域に適用する」(1967: 67)とか「日本の家庭には非常に顕著な連帯感がある」(1967: 68)と述べているが、このあたりの指摘を、家庭(ウチ)が社会的集団の基本単位であってそこには相手中心主義が存在する、と解釈することも可能であろう。

他方、日本社会の集団主義については様ざまな批判がある。しかし「集団」の概念に違いがあるようである。単なる複数の人間の集まりを集団と呼べば、それは筆者の言うグルピスモの単位である小集団とは異なることになる。グルピスモの単位である小集団とは、ある場(空間的な枠)を共有してある種の社会的活動をするような限定された意味の集団のことである。問題の小集団はその構成員間のつながりにおいて、一番強い家庭(ウチ)からムラ、そして一時的な集まりまでが含まれる。

心理学者の河合隼雄が、一時的な小集団を社会的な基本的単位とする格好の例を紹介している(2010: 14)。彼は、アメリカ人と日本人のスピーチのスタイルに基本的な差があって、よく言われるように、「アメリカ人はそのスピーチをジョークで始めるのに対して、日本人は弁解ではじめる」のだが、その理由を考えてみて理解した。そして言う。「日本で人々が何かのことで集まってくると、彼らはある種の一体感を共有します。この一体感は、その人たちが個人的に知合いであるかどうかに関係はありません。したがって、誰かがスピーカーになると、その人は他の人々から区別されることについて弁解しなくてはなりません。誰であれ、他と離れて一人立ちしてはいけません。しかし、西洋では人々がたとい一堂に会したとしても、それぞれが他とは異なる個人であります。したがって、典型的なアメリカのスピーカーは何かジョークを言って、人々が笑いを共有することによって一体感を感じられるようにするのです」。簡単な集会においても、日本ではグルピスモが形成され、その小集団では相手中心主義が作動する、ということである。

また一方で、日本のこの伝統的なグルピスモも、時代の推移とともにかなり変化してきたようである。戦前の日本ではグルピスモの典型的な小集団である家庭では、ベネディクトも指摘しているように、日本人はまずその内部で階層制度の習慣を学んだが、その習慣には敬語も含まれていた。「家の中では父親は絶対的な力を持っていて、母親も子どもも、敬語で話さなければなら」なかったのである<sup>12)</sup>。しかし戦後のこの数十年間に家庭の社会的意味や構造が大きく変化し、家庭の親子の間や兄弟の間で丁寧語(敬語)が使われることがごく希になってきている。高野陽太郎は、そのような現代の若者を、場とか枠を無視して数名集めて心理学的な実証的研究を行い、ほとんどすべての実証的研究は「日本人=集団主義」説を支持していないと

いう事実は、やはりうごかしがたいものであることがわかる、とする(2008: 95)。高野が認める形の集団が問題とされるのなら、そのような集団主義は錯覚と呼べるかもしれないが、グルピスモはこれまで日本に存在してきたし、普通の日本人ならその実際の生活体験からも、日本の現代社会に依然として存在することが理解できるのではなかろうか。たとえば養老孟司(2003: 195)は、「世間」についての考え方を発表した阿部謹也との対談で、日本人が複数の小集団に属しながら生活している様子を次のように説明している。「日本人は物事を考えるときに、最初に自分なりの“世間”を漠然と想定する。家族、近所の人、勤め先の人たちという、まさに顔の見える範囲の人たちの重層構造になっているのでしょ。彼らの反応を予想してから自分の行動を決めるわけです。」筆者はこの説明から、養老はグルピスモの存在を認めてその小集団を「世間」と呼んでいる、と解釈している。

### 3.2.2. 相手中心主義の解釈

筆者の言う相手中心主義の解釈は、鈴木孝夫にも負っている。鈴木(1975: 182-3)は「私たち日本人は、絶えず自分の本当の気持ち、意のあるところを誰か適当な他人に分かって貰うことを求めているらしい<sup>13)</sup>と推測し、そこに見られる日本人の自我の構造は人間関係の把握の様式と深い関係があるとする。「日本人は自分がなんであるかという自己同一性の確認を他者を基準にして行う傾向が強いからである。」そして述べる。日本人は「他者の存在を先ず前提とし、自己をその上に拡大投影して自他の合一をはかるか、他者との具体的な関係において、自己の座標を決定しながら自己確認を行うかのどちらかの方式をとる。どちらも相手を基準とする自己確認である点では共通のものと言える。」この「相手を基準とする自己確認」を、筆者は相手中心主義と呼んでいる。そして 精神病理学者の木村敏(1972)は、それを「人と人との間」と呼んでいる(と、筆者は理解している)。

なるほど、鈴木が上で言っているように、日本語の発話行為においては、話し手は発話行為の役割としては絶対的な主役とはならず、発話の相手を基準として自己を確認する相対的な役割を演じる。しかし発話行為を実現する者としての主体性まで放棄してはいない。日本人も自ら考えて自ら発言しているのである。河合隼雄によれば(2010: 157)、日本人にも自我はあるが、その自我の在り方が問題になるのであり、「その自我は他とのつながりを前提としていて、その在り方は、「個として確立した自我が他とどうつながるかという関係ではなく」、「つながりのほうが自我よりも先行するという形」のものである。「自我」ということばの意味が「哲学で、認識・意志・行動の主体として、外界や他人と区別されて意識される自分」(北原『明鏡』)であれば、発話行為者として自己を確認するときにこそ相対的な方法をとるが、発話行動ではその主体となれるのである。

この点から筆者は、日本文化を理解する鍵概念として〈他律性〉を提案する荒木博之(1990)には、少し無理があると思う。「他律」ということばの意味が「自分の意志からでなく、他からの命令や支配によって行動すること」(北原『明鏡』)であれば、発話行為でもその主体となっ

ていない、ということになるからである。荒木は「この〈他律性〉は、これまで論じてきた『自己不在』『受身性』『自発指向性』と密接にからみあったものである」とする(1990: 205)。このからみ合いは妥当であろう。「自己不在」や「受身性」は、筆者の解釈では和らげ表現の遠回り型に相当するし、「自発指向性」は隠れみの型に相当する。しかし発話者は、和らげ表現であれ、発話の主体として行動しているのである。

他方、広瀬・長谷川(2010)は、まず、「伝統的日本人論で主張されている集団モデルを言語学的立場から批判的に検討し、集団性の論理が日本語の本質の特徴とは相容れないところがあることを明らかにする」ために研究書を出版し、「日本語に見られる個の主体性、つまり、個としての自己表現に注目し、そこに日本人の自己意識の強さが反映されていることを言語学的に論じ」ている(2010: v)。日本人の言語行動に主体性が欠如している、という見解から出発しているが、この研究も筆者には、一般的にいう集団主義とグルピスモの違いを見落とし、上記のような相手中心主義の意味を誤解しているように思われる。この場合、養老孟司(2004: 216)の指摘が参考になるだろう。養老は「日本は前から“個”がないと言われている。外国人には、個人としての意見をもたず、集団主義的であると思われていた」が、「日本は個々人の中に個がないのではなく、“公”の個がないのだ」と気づいた、と述べている。

### 3.2.3. ウチとソトについて

筆者はグルピスモによってウチとソトの違いが意識されると理解している。ウチとソトということばはこれまでも日本の対人コミュニケーションの特徴を説明するキーワードとして使用されてきた。国語辞典(北原『明鏡』)では、ウチという日本語にはいくつかの語義が登録されているが、そのなかで和らげ表現に関連するグルピスモにかかわるのは「自分の家や家族、また、他人のそれを含んで、広く家や家庭一般をいう」と「自分のところの意で、自分が所属する組織や集団をいう」という語義であろう。そしてソトの関連語義は「自分の家や家庭でないところ」と「自分が所属する組織や集団の外部。組織外。所属外」であろう。しかし20世紀の後半になると、家庭の仕組みはかなり変化してきた。本来のウチという概念が二重になり、その二重の枠が本来のソトと対置される構図になってきている。

そのウチを二重にする構図で現代日本の対人把握と言語行動を説明しようとしているのが、三宅和子である。三宅(2011: 11)は発話の環境を、発話者が自己を取り巻く3層の同心円上に描いている。すなわち、ウチは自己を間近に取り巻く家族やごく親しい人々を指し、その周りをごく親しくはないが自己やウチと関連のある人々の層であるソトが囲み、その外側にヨソの人間層が位置する、ということになる。そして言う。「これまでの敬語を中心とした配慮の研究は、このモデルでいえば、自己と普段から関係があるソトの人たちとのやりとりの考察が主であった。自己は、このソトの部類の人に対して最も緊張感を持ち、言語行動に最も細かい配慮を示す。自分にごく近い家族のようなウチの人たちにはリラックスでき、言葉づかいに細かい注意を払う必要がない。いっぽうヨソの人たちに対しては、ソトの人に対するほどの緊張

や配慮を必要としない」。筆者のグルピスモの仮説によれば、三宅のウチとソトに含まれる枠は、筆者のウチのなかにあるヨコ関係の者たちとタテ関係にある者たちに相当することになり（たとえば会社という小集団なら、同役の関係にある者たちはヨコ関係にあり、その小集団の組織を特徴づける役割の上下関係のある者たちはタテ関係にある）、ヨソが筆者の考えるソトになるのではなかろうか。三宅はこの3分類の案を臨床心理学者の中山治の分析から示唆されたという(2011: 20-21)<sup>14)</sup>。

しかし3.2.1. でベネディクトが観察しているように、日本の社会がかつてウチとソトに二分されていた時代には、敬語をはじめとする言語行動の細かい配慮は家庭で教えられていた。それは支配的社会層の話であって被支配層の存在も考慮しなくてはならないとはいえ、配慮表現を通時的に研究するときにはこの点に注意する必要があるであろう。この点で気になるのは滝浦真人(2005)の敬語研究である。滝浦は「日本語敬語は、最終的に使用の鍵を握るのが“ウチ/ソト”の領域性であるような、つまりは時枝が『語彙論的』と呼んだものをもう一步進めた『語用論的』現象なのである」(2005: 231)として、日本語の敬語使用の説明にウチとソトの概念を使っている。発話者が敬語を使用するかしないかの「鍵は聞き手の位置にある。すなわち、聞き手を“われ＝われ”関係の中に取り込むか否かが、そのまま〔話し手―聞き手〕関係を“ウチ”の関係と認定するか“ソト”の関係と認定するかの相違となって表れる」(2005: 250)として、252頁の表ではウチを敬語不使用と、ソトを敬語使用と結び付けている。筆者の提案するグルピスモの考え方に従えば、その小集団がウチに相当し、かつては其中でこそ、敬語をはじめとする言語行動の配慮が行われてきたことになる<sup>15)</sup>。滝浦はウチとソトの二分法に従っていて、中山の提案しているヨソは考慮していないようである。敬語の使用・不使用という点から考えれば、滝浦のウチとソトは、筆者の言うウチのなかの、ヨコ関係にある者たちとタテ関係にある者たちのことを指すのではなかろうか<sup>16)</sup>。

### 3.3. 日本語のポライトネス研究について

筆者は発話行為の語用論的説明概念として和らげ表現を採用し、それにのっとって日本語表現を分析してみた。日本には現在、ポライトネス研究に関連する様々な研究が行われている。ここでは和らげ表現の妥当性を検証する意味で、その一部を紹介し、コメントを加えることにする。

#### 3.3.1. 配慮表現について

筆者は日本における西欧起源の語用論の研究に触れて、日本語学の分野で使用されている「配慮表現」という術語の存在を紹介した(2012a: 51-2)。ここでは主として山岡など(2010)の提唱する配慮表現について考えてみたい。山岡などではその第4章で「ポライトネス理論」を扱い、「リーチのポライトネスの原理」と「B&Lのポライトネス理論」を紹介している。しかし第2部「日本語の配慮表現」では、配慮表現がリーチの理論と異なることを示しつつ、配



慮表現というものはポライトネス研究とは異なるということから出発しているが、それにもかかわらず、たとえば第8章の「《依頼》における配慮表現」ではフェイスというB&Lの説明原理を使っているし(2010: 145)、第11章の「配慮表現としての副詞」ではいくつかの副詞の配慮表現としての用法がリーチの気配りの原則や一致の原則によって説明することができるという(2010: 192)。すなわち、山岡などの配慮表現の解説にはB&Lの理論の一部やLeechの理論の一部が混在しており、包括的な理論としての体系はどうなっているのかが不明である。日本語のみを対象としていて、その他の言語にも当てはまるような「原則」を探求するという姿勢はうかがわれない。言語の対照研究には利用しにくいことになる。少し具体的に見ていこう。

山岡など(2010: 138)によれば、ポライトネスと配慮表現を明確に区別したのは生田(1997)であるという。日本語の語用論的研究でポライトネスという術語を使用することの不都合については、筆者はその生田のこたばを注の50として紹介しておいた(2012a: 56)。その主旨は、山岡などによると、「ポライトネスが言語行動の選択を巡る方略についての理論であるのに対し、配慮表現は固定された言語行動に対応する表現の選択を巡る理論である」となり、発話の相手の負担感が相対的に緩和されるように選択された表現が配慮表現となる(2010: 139)、と言う。「相手の負担感が相対的に緩和されるような表現の選択」が日常会話で行われているとすれば、発話の相手は常に負担感を抱くものであろうか。それは限られた種類の発話についてであろう。日常会話では敬語のなかの丁寧表現のような、負担感にかかわらない発話が多いが、そのような表現においては、配慮表現はなされないことになるのであろうか。彼らの配慮表現の定義は「対人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられる言語表現」である(2010: 143)。この定義からすると、日常会話の広い部分で配慮表現がなされているはずだが、そこで相手はいつも負担感を抱いているものであろうか。

また、「ポライトネスの原理とは反比例的な原理である『配慮表現の原理』が存在する」として、リーチの気配りの原則と寛大性の原則について、ポライトネスの原理が「他者の負担を最小限にせよ」なら配慮表現の原理ではそれに「他者の負担が大きいと述べよ」が対応している(2010: 140)。しかしこの反比例ということも理解できない。「せよ」と「述べよ」が同一次元の指示であれば反比例であるとも解釈できるが、「他者の負担が大きいと述べることによって他者の負担が小さくなる」こともあるであろう。たとえば、山岡などが述べているように(2010: 141)、忙しくもない者が相手を訪問すると「お忙しいところ、わざわざありがとうございます」と言われるのは、なるほど他者の負担が大きいと述べているが、訪問者は社会的な評価(いつも忙しいのは社会的に当てにされているからだ)を受けて満足度が高くなる(負担感が小さくなる)、というような場合である。

山岡など(2010: 139-40)は配慮表現が「個別言語による表現法に差異がみられる部門である」

とするが、配慮表現が「固定された言語行動に対応する表現の選択を巡る理論」であれば、固定された言語行動はどのような言語にも適用されるであろうし、そのときの表現を選択するときの理論が明示されれば、言語の対照研究に応用できるであろう。

### 3.3.2. 和らげ表現に関連した研究のいくつか

筆者は語用論という観点から和らげ表現という説明原理を提案した。和らげ表現に関連した研究をいくつか見てみよう。

まず、3.2.3. で言及した中山治の研究である。筆者はおもにグルピスモという社会構造の特徴から和らげ表現を考えてきたが、臨床社会心理学者の中山は対人恐怖という視点から「ほかし」という概念を使って日本人のコミュニケーションの特徴を分析している。「日本人の曖昧でほかした表現に基づくコミュニケーション」をタイプに分けて列挙している（1988: 11-28）。それらは (a) イエス、ノーをはっきり言わない、(b) 断定した表現を避ける、(c) 言いにくいことを相手に伝える（遠回しの表現）、(d) 政治的状況における玉虫色、である。筆者の和らげ表現手段と比べると、大まかに言って、(a) と (b) はほんやり型に相当し、(c) は遠回り型に相当しよう。(d) の「政治的状況における玉虫色」は、具体的には (ア) 表現を両義的、多義的なものにする、(イ) 自分の意見を言わず、人の口の形を借りて言う、(ウ) 論点をはずし、正面から答えない、に分けられている。(ア) は筆者の言うほんやり型に、(イ) は隠れみの型に、(ウ) は遠回り型に相当しよう。ただ、このような日本語表現に特徴的な傾向が対人恐怖という精神症状に由来する、ということになれば、反論が出るであろう。大多数の日本人はこの症状とは無関係な正常者であるからである。山中は様々な検討をした結果、「日本人は対人恐怖の心性を潜在的にもっているとする、従来よりいわれてきたような仮説を支持してもよいと思われる」と断定した表現を避けつつ述べている（1988: 69）。精神病理学とは無縁な筆者には、潜在的な心性が発話行動を支配するのかどうか理解できない。筆者の仮説であるグルピスモの小集団の世界はウチになるが、そのウチの者はソトの者に対して一種の敵意に似た冷たさを抱いていることはよく指摘されている<sup>17)</sup>。この敵意に似た感情は、裏返せば恐怖心になるのだろうか。

ほかしことばという表現は、文化庁の「国語に関する世論調査」（平成12年1月調査）に「ほかす言い方」という項目があったことで新聞でも目にするようになった。たとえば朝日新聞は、2000年の5月25日（朝刊）に、「ほかし言葉 十代の半数が使う」という見出しで、この世論調査の結果を報じている。「～のほう」「～とか」「～的」などの使用である。そして6月10日（夕刊）には「ほかし言葉と若者コミュニケーション」という副題のついた「べったりからさっぱりへ」という題名で関西大学の辻大介専任講師（当時）の記事を載せている。ほかし言葉の背景にあるのは「べったりした関係からさっぱりした関係へ」という意識変化ではないか、と述べている。しかし筆者は注の3で述べたように、若者のほかし表現の多用は、若者が日本語本来の言語表現の特徴を敏感に察知している証拠であろうと解釈している。

他方、陣内正敬（2006）は、国立国語研究所が20世紀末に行った「言語行動における配慮」に関する面接とアンケートによる調査の結果の一部を、「ほかし表現の二面性」という題名で、若者ことばとされる新ほかし表現（「～とか、～みたいな、～って感じ」など）を「近づく配慮」と解釈して分析している。興味深い報告であり、新ほかし表現の出現の背景に関する解釈は、「まず日本人としてのほかし志向が底流にあり、それが形を変えて次々と『発明』されており、そしてそれをある程度認知・許容する社会が存在しているということになる」（2006: 130）と述べており、筆者の解釈とよく似ている。しかし陣内の報告には確認したい点がいくつか含まれている。陣内がほかし表現としている表現手段は、筆者が和らげ表現のなかのほんやり型に分類している手段であり、この表現手段は筆者にとって、表現される概念をきっぱりすることで発話者として話し相手との対立姿勢が明確になるのを避けることを目的としていることになる。陣内は「従来の考え方では、ほかし表現は敬意や丁寧さと結びつき、より改まった文体を作り上げるものとして、つまり相手に『近づかない』配慮をした表現として了解されていたと思われる」（2006: 126）としているが、この場合の「敬意」や「丁寧さ」との結びつきは、特定の文脈情報から「対立姿勢が明確になるのを避けること」の結果として生まれる解釈ではなからうか。たとえば中年女性が果物屋の前で店主に向かって「このリンゴ 一つ / 一つほど ください」と言った場合、女性は発話者として店主との対立姿勢を和らげているが、その和らげられた姿勢が敬意と解釈されるか、丁寧さと解釈されるかは、発話の文脈情報を考慮することで、二次的に決められることであろう<sup>18)</sup>。また、陣内（2006: 131）は新ほかし表現の機能を、その「集団語的性格により親和性は増すが、一方、ほかし表現そのものの本質としてある遠慮表現によって、相手との程よい距離が保てるというからくりなのである」としつつも、用例のなかには遠慮意識で説明するのが難しいもののあることを認め、新ほかし表現の出現の理由については「推察の余地のないタイトな表現よりも緩くて遊びのある表現の方が場の雰囲気や和らげてくれる、という表現効果をねらったこと」と説明するのが妥当ではないか、としている。この説明は筆者の和らげ表現のほんやり型の目的と一致している。しかしながら陣内は、つづいて、新ほかし表現が使われるという「この現象は、日本語の特徴のひとつとして言われている場面や文脈に依存する割合の高い『高文脈性』の新たな発現、ないし創造という側面も指摘できそうである」と述べているが、新ほかし表現の存在を日本人の発話姿勢に影響を与えていると仮定される高文脈依存性と結びつけることは難しいのではなからうか。筆者の解釈は、この日本語の特徴は文化の均質性と結びつき、それが日本社会の特徴のひとつであるグルピスモと結びつくが、その小集団において観察される和らげ表現では、ほんやり型ではなくて、隠れみの型に結びつく、ということになる。

つぎに、筆者も拙著のなかで扱ってきた「主語のこと」、「敬語（待遇表現）のこと」、「人称代名詞のこと」などがあるが、これらは微妙に関連づけられており、個別のテーマとしては扱いきれない。カナダのモントリオールで長年日本語を教えてきた金谷武洋の著書を紹介しておく

だけにしよう。金谷は日本語を外国人に教える時の教授法を色いろ工夫してきたが、『日本語に主語はいらない』(2002)では「日本語に人称代名詞という品詞はいらない」、「日本語に主語という概念はいらない」という章題で論を進めている。筆者は拙著で、疑似人称代名詞という呼び名を採用したし、主語の代わりに主題という概念で日本語の文構造を解説している。主旨は似ているのではなかろうか。また『日本語は敬語があって主語がない』(2010)ではユニークで面白い論を展開しているが、この題名自体に主語・人称代名詞・敬語の絡み合いが見て取れる。このような絡み合いのなかに和らげ表現という分析手段を当てはめればどのような構造が見えてくるのであろうか。今後の検討課題のひとつである<sup>19)</sup>。

### 3.3.3. 言語行動と和らげ表現

飛田良文(2001)は序文で「外国人の行動表現を理解するには互いに解説するための手順が必要になる。仮説を立てて推理していくことになる。日本人の行動原理は、ルース・ベネディクトの『菊と刀』や中根千枝の『タテ社会の力学』などに帰されている。しかし、日本語教育学に必要なのは、具体的な生活行動なのである。本巻は、こうした未開拓の分野を切り開くために、どのように考えたらよいか、研究方法を考え、具体例を集成し、体系化しようと試みたものである」と断っている。その第3章は野元菊雄(2001)が「日本人の言語行動の特色」という題で論じている。野元はそこで以下のテーマを扱っている。「言語行動と非言語行動」(日本語では「先日はご馳走さまでした」などの発言をするが、欧米の言語社会では、おなじような状況でも何のあいさつもなし、すなわちゼロの言語行動)、「肯定的」(日本語の言語行動は否定的ではない、否定がしにくい。ここに「相づち」の現象が含まれる)、「否定すること 一察すること」(日本文化の均質性と、否定する代わりに察する文化があること)、「質問ざらい」(目立ちたくない傾向)、「単数・複数」(日本語には文法的な単数・複数の別がない)、「敬語表現と敬意表現」、「内(中)と外」、「話し言葉」(日本語は話し言葉と書き言葉との差が著しい言語である)、「主なところは最後にくる」(文構造の特徴)、「その他」である。これらのテーマの多くが、拙著では和らげ表現と関連づけて解説されている。

この言語行動というキーワードは、飛田によれば上記のように「日本語教育学では未開拓の分野」であるという。他方、1998年に結成された社会言語学会は、2009年の学会誌『社会言語科学』に、大阪府立大学(当時)の野田尚史が企画した第23回研究大会シンポジウムの報告を載せている。その題名が「配慮言語行動研究の新地平」である。「日本語を中心に、それ以外の言語も視野に入れながら、『配慮言語行動』の研究をこれからどのように展開していけば社会言語科学として新しい研究領域を開拓できるか」(2009: 179)が議論された。筆者が語用論関係で扱ってきたテーマのいくつかは、今後は配慮言語行動という視点から研究されていくことになるのであろう<sup>20)</sup>。

一方、本項の3.2.3. で言及された三宅和子は配慮の言語行動を論じている。上記のシンポジウムにもパネリストとして参加している三宅(2011: 4-10)は、配慮言語行動の研究の視座に

について概説しているが、対人関係や場面に留意して行う表現や行動を総称して「配慮言語行動」と呼ぶことにしている。第Ⅱ部の本論からもわかるように、三宅はこの配慮言語行動を言語間の対照研究が可能のように規定している。10頁には「配慮言語行動の研究範囲」の図が示されているが、その同心円の中心に配慮表現・配慮行動が置かれ、一番外側の円に文化が置かれている。筆者にはこの点に疑問を感じている。配慮言語行動を選ぶときの背後にある動機は社会構造などを含む文化ではなからうか。すなわち、その同心円の中心には文化が置かれるのではなからうか。それというのも、上記の社会言語学会のシンポジウムで、「謝罪の対象となる事態をどうとらえるかが地域によって違う場合、どう対処すればよいか」という質問に対して「事態のとらえ方自体も研究対象になる。地域による違いのほか、閉じられた古代社会と開かれた近代社会でも事態のとらえ方に違いがあり、それが言語表現に反映していると考えられる」と答えられているからである(2009: 182)。この「反映」は文化が配慮言語表現の背後にある動機のひとつとして機能する、ということではなからうか<sup>21)</sup>。

この点については杉戸など(2006)も筆者の判断を支持していると解釈される。杉戸などは言語行動についての配慮を説明するとき、「配慮をとらえる枠組み」を提示しているが、その枠組みは「留意事項」「価値・目標」「判断基準」で構成されている。そしてその「判断基準」の「何をよりどころにして配慮するか?」という問いに対して、その具体例のひとつに「社会規範についての認識」が挙げられているからである(2006: 7)。

いずれにせよ、新しい視点で配慮言語行動が研究されていけば、筆者の提案する和らげ表現という分析手段がそのなかでどのような位置を占めるのか、明らかになってくるであろう<sup>22)</sup>。

#### 4. 和らげ表現研究の今後

日本語は本来的に、和らげ表現の表現手段であるほんやり型を発話の基本に位置づけてきたようである<sup>23)</sup>。個人主義の西欧世界の諸言語とは、その発話姿勢が根本的に異なっている。

他方、ポライトネス研究は主として英語文化圏で開発されてきた。そして宇佐美(2008)などを見ればわかるように、世界的な規模で研究されている。他方、ヨーロッパの文化圏で、ポライトネス研究が目指している言語用法の一部(対人配慮表現)が古くから修辞学や文体論で研究されてきた。この両者を検討したうえで出されてきた、言語用法の分析手段のひとつに、*atenuación*あるいは*mitigation*(和らげ表現)という概念がある。筆者はこの概念がスペイン語学の分野でどのように開発されてきたかについて、三好(2012a)で解説した。本稿で紹介した拙著では、それらの研究にCaffiを加え、和らげ表現の具体的な表現形式をほんやり型・遠回り型・隠れみの型という3種類に分類できるという作業仮説を設け、現代日本語の様々な和らげ表現を紹介した。

筆者が提案する和らげ表現とは、ポライトネス理論のそれぞれの戦略に従って選

択される表現手段に共通する、ひとつの意味的特徴にすぎない。たとえば off record のストラテジーを実現する方策のひとつの understatement (控えめ表現) や on record の positive politeness のストラテジー6に hedging opinions があるが、これなどが和らげ表現に対応する。

他方、ポライトネス研究とは FT を緩和するための作戦とそれを実行するための方策 (言語表現) の選択とも言えようが、そのために、話し手や話し相手の利益や負担が問題になっている。この利益や負担についても、その度合いの軽減・緩和、すなわち「和らげ」が問題にされる。しかしこの和らげの現象は、筆者の提案する和らげ表現とは質が異なるので、今後の研究においてはこの違いを明確に意識する必要がある。

和らげ表現という言語表現の分析手段は、宇佐美 (2008) が解説しているポライトネス記述研究に属しているが、言語間の (たとえば日西両語の) 対照研究のためのひとつの手掛かりにならないだろうか。筆者は今後、このあたりの可能性を求めて研究を進めていきたいと思っている。

## 注

- 1) 「注意書き」では、まず、世界のスペイン語文化圏の一般的な教養人を読者に想定して、日本語のことばの使い方をスペイン語で解説するときの注意を並べた。筆者は日本人であるが、日本語と日本文化を客観的に解説したいので、第三者的な態度で記述すること、日本語をスペイン語に転記するときの方法、「句」(frase)と「文」(oración)の違い、参考文献は最重要のものに限ること、を断った。その第2点目は「スペイン語による日本語の転記の方法」についてである。スペイン語文化圏で日本文化や日本語を学ぶ人たちは、その大半の参考文献が英語で書かれたものであろうし、日本語の表記に使うローマ字が (ヘボン式であれ日本式であれ) 英語がベースにしてあるため、学習者がローマ字書きの日本語を、単純にスペイン語風に発音してしまうことがある。日本語の発音をすべて適切にスペイン語の表記字母で転記することは不可能であるが、出来る限りの工夫をして、そして発音記号を使用しないで、スペイン語圏の人たちが日本語のことばを原語の発音に近い音で発音することができるよう記述した。具体的には、ローマ字の H, J, W, Y, GE, GI をそれぞれ J, Y, U, I, GUE, GUI にした。たとえば NIHON → NIJON (日本), MEIJI → MEIJI (明治), WATASI → UATASI (わたし), YAYOI → IAIOI (弥生), GENJI → GUENYI (源氏) などである。暫定的な記述方法であり、拙著にのみ有効な転記方法である。

もう一点、断っておいた。採用する活字のことである。スペイン語文のなかに、問題となるスペイン語や英語の語句を提示するときには、慣習に従ってイタリック体の活字を採用した。そして日本語の語句の提示にはスモールキャピタルの活字を使用した。

- 2) Cf. 中根 (1967: 70-71)。
- 3) たとえば水谷 (2011: 78) がある。水谷は現代の若者の責任回避という発話傾向に苦言を呈しているが、筆者はむしろ、彼らの母語の仕組みに関する言語直観の鋭さに敬意を表するものである。というのも、日本語の伝統的な発話姿勢の傾向のひとつに和らげ表現があり、和らげ表現という語用論的表現手段は基本的に責任回避というニュアンスを伴うものだからである。
- 4) 筆者は相づちに基づく日本人の発話行為を「対話」ではなくて「会話」であろうとした。今回、拙著の説明原理の妥当性に関して、それを検証するために様々な資料にあたったが、相づちから対話の不在を説く研究者として水谷信子 (1993) に出会った。そのころすでに日本語教育関係者のあいだでは相づちの重要性が認識されており、明治書院の雑誌『日本語学』では1988年に(12月号)相づち

の対照研究も発表されていたそうである(1993: 5)。相づちを使う日本語の話し方を「ひとつの発話を必ずしもひとりの話し手が完結させるのではなく、話し手と聞き手の二人で作っていくという考え方にもとづいた形」であり、「これは『対話』でなく、むしろ『共話』とでも呼ぶべきものでないかと思う」と述べている(1993: 6)。日本語の国際化(?)のためには共話から対話に切り替えることが求められるが、その切り替えは「分かり合っている者同士の話し合いから、分かり合えるかどうか分からない者同士の話し合いへと切り替えである」(1993: 9)と指摘している。筆者の挙げている「文化の均質性」とグルピスモの相手中心主義とも関連した指摘であろう。

哲学者の中島義道(1997)は日本における対話の不在という現象を別の視点から説明している。「〈対話〉とは他者との対立から生まれるのであるから、対立を消さないし回避するのではなく『大切にすること』が重要であるが、「他者を消去することによって対立を消去するという二重の操作」をしている日本人は、「各人が個人として他者に向き合うという『個人主義』を全身で拒否してきた」ということになる(1997: 190-91)。筆者が仮定するグルピスモ(日本という社会を構成する基本単位は共通の枠のなかにいる人々が形作る小集団であり、西欧世界のような個人ではないという特徴)と関連する指摘である。

さらに、最近、日本の社会における対話の不在を指摘する新聞記事を目にした。劇作家・演出家の平田オリザ(2012)が次のように語っている。「日本語は、閉じた集団の中であいまいに含意を形成するのにはとても優れた言葉です。日本文化の一部ですから、悪い点ばかりではない。近代化以前の日本は、極端に人口流動性の低い社会でした。狭く閉じたムラ社会では、知り合い同士でいかにうまくやっていくかだけを考えればいいから、同化を促す『会話』のための言葉が発達し、違いを見つけずり合わせる『対話』の言葉は生まれませんでした」。平田も筆者と同じように、日本のこれまでの社会には「対話」がなく、あるのは「会話」であった、としている。

他方、ロシア語同時通訳の米原万理は「ヨーロッパ人は、中国、韓国人もそうですが、問題な点を鮮明にしようとしますから、対談は対決で、それは一種のゲームなのです。ところが日本人は、人間関係までも壊れるのではないかと慮って、対決を避けよう、対決点をぼかそうとする答え方になる」と指摘している(養老孟司 2003: 139)。

- 5) 筆者はこのあたりのB&Lの理論を理解するために、おもにB&L(1987: 55-84)とその和訳(2100: 71-108)を参照した。
- 6) 日本の研究者のなかには、B&Lの理論を説明するときに、彼らの術語であるフェイス(face)を「面子」と和訳した者もいた。そうすると、日本人には訳が分からなくなったものである。たとえば、生田(1997: 67)は「人間には皆、面子(face)というものがある。たいていのコミュニケーションの場において、その面子は脅かされる。人に何かを頼むという行為を考えると、頼まれる側の人間の面子を脅かすものであることが多い。その依頼を相手が断ることは依頼者の面子を潰すことになるから、相手はそれを避けようとする断れなくなる」と述べている。日常会話の依頼表現の場で、依頼を断られた者が面子をつぶされるとは、かなり特殊な依頼であろう。北原の『明鏡』によれば、日本語の「面子」が「体面、面目」と同義語として使われていて、「面目」が「世間に対する名誉・体面」。また、世間から受ける評価」ということになるが、そうであれば、生田の説明は素直に理解することができない。日本なら依頼された者が面子(体面)を脅かされたと考えるケースは例外的であろうし、簡単な依頼を断られて面子(世間から受ける評価)を潰されたと思うケースも例外的であろう。逆に、ひとからものを頼まれるほうが体面を保つという解釈も成り立つであろう。
- 7) たとえばBeinhauer(1978: 113)を参照のこと。
- 8) 発話の姿勢ということであれば、これまでしばしば指摘されてきたように、西欧諸言語と日本語とは、かなり明確な相違がありそうである。鈴木孝夫は人称代名詞のことでその相違の存在を以前から主張してきた。最近では日本人の発話の心的態度として「日本人はできる限り、話の相手との心理的対決を避けたいのです」(2009: 211)と述べ、また「日本語ではヨーロッパ語とは違って直接話の相手を言葉で指すことを極力さけて、その人の社会的地位、自分との家族関係、そしてその人のいる場所や方角をいうことで、間接的に相手だということを示すのです。相手との関係はむき出しの直接的なものより、やんわりとした間接性のあるほうがよいというこの感覚は、古い日本の作法で人と話を

するとき相手の顔を真正面から見据えることは不作法であり、また相手の目を直視し続けることは避けるべきだとしていることにも窺えます。つまり日本人の平常の人間関係の在り方を少なくとも言葉としぐさの点から見れば、対立対決の欧米型とはほど遠い柔らかいものと言えるでしょう」とも言っている。なお、この場合の「やんわりとした間接性のあるほう」こそ、筆者がこだわっている和らげ表現である。

- 9) ルイス・フロイスは16世紀の末ごろ、日本語とヨーロッパ諸語との、発話姿勢に関する基本的な違いを指摘して、「ヨーロッパでは言葉の明瞭であることを求め、曖昧な言葉避ける。日本ではあいまいな言葉が一番優れた言葉で、もっとも重んぜられている」と述べている(1991: 188)。このような違いのある日本語に、グライスの会話の協調の原理を当てはめてはめでたいであろうか。
- 10) 緩叙法はヨーロッパの伝統的な学問である修辞学が規定する文彩のひとつであり、筆者の和らげ表現にも関係している。
- 11) 山岡など(2010: 68)の注1と注2には、Leechが使っている術語について、自分たちが池上・河上(1987)の訳語を変更して使用する旨の断りがある。筆者はかつて池上・河上の翻訳を読んでLeechの理論がわからなくなった経験がある。LeechのTact Maximが翻訳では「気配りの原則」になっている。このtactという英語と「気配り」とが結びつかなかったからである。英語のtactは英和辞書ではよく「機転、如才なさ」などと訳されている。Leechが使っているtactということばの語義は、Littleの辞書の見出し語tactの2番目の語義、すなわちReady and delicate sense of what is fitting and proper in dealing with others, so as to avoid giving offence or to win good will; the faculty of saying or doing the right thing at the right time 1804.に相当するのではなかろうか。とすれば、話者の一方的な心的作用である「気配り」には対応しにくい。ちなみに「気配り」は、北原の『明鏡』によれば「失敗や失礼がないように気を使うこと。配慮」とあり、「配慮」は「よく考えて心くばること。心づかい」、そして「心づかい」は「あれこれと気を配ること。配慮」となっている。tactに相当する日本語こそ「配慮」ではないだろうか。
- 12) 遠藤織枝(2012: 74)によれば、戦前戦後のラジオドラマを調べてみると、「二人称詞の『あなた』が目上の人にも敬意をこめて使われていて、この時期なら確かに敬称と言えた」が、現在では「対等が目下の人にしか使えないとされ」ており、その価値の下落はこの数十年の間に起こっていることがわかるという(2012: 194-5)。
 

また、日本の食生活を研究している岩村暢子(養老孟司 2012: 25-6)は、この数十年の間に「家族」(グルピスモの小集団の典型)の構造が大きく変わってきた様子を、つぎのように説明している。「一九六一年、日本の家族の約七割が核家族になりましたが」「そのころの核家族にはまだ求心性があったような気がするんです。『昔ながらの家長中心の封建的な家ではなく、子ども中心の明るく楽しいファミリーをつくらう』という新世代の思いが、六十年代の核家族には反映されていたような気がする。ところが今の核家族は、『子ども中心』というでもない。みんなそれぞれが中心の、ばらばらの『個』の集まりようになってきて、その『個』が侵害されると、家族でいることが危うくなって壊れやすくなっている。『個』が侵害されるといっても、権利や自由のことではなくて、自分の好みや都合、ペースを侵されたくない、というような感覚。それが叶ってこそ一緒に居られる家族だから、つながりはとても緩やかになってきている。」
- 13) 続いて鈴木は以下のように具体的な説明をしている。「他の人に賛同して貰いたい、同意して欲しい、共感を味わいたいという願望は私たちの他人との関係の中で、手を変え品を変えて各種の行動に現われてくる。何もかもぶちまけてしまいたい、すっかりしゃべって胸がせいせいするというような態度、日本の犯罪者の自白率が驚くほど高いという事実、外交の舞台でしばしば問題になる日本人の機密や秘密を保持することの難しさ、それらはすべて、重大な問題を一人心にしまっ、その重みにじっと耐えて行くという固く閉ざされた自我のしくみが、私たち日本人にはきわめて弱いのではないかと思われる。」この指摘をB&Lのポライトネス理論と関連させると、日本人の発話者としての姿勢には基本的に、ポジティブ・フェイスがネガティブ・フェイスよりも遥かに優勢である、ということになる。
- 14) 中山治(1988: 88-89)は、日本人のコミュニケーションの背後にある過剰配慮は状況に依拠して生じ



るとする。その状況依拠性は相手と自分との心理的距離において現れるが、「便宜的に夫婦、親子、兄弟といったような非常に親密な間柄をウチ、自分とは全く無関係な赤の他人をヨソ、学校や職場、近隣の人々といったウチとヨソとの中間的、両義的な性格を持つ人々をソトと呼称した場合、過剰配慮はソトの人々とコミュニケーションする際に最大となり、ウチやヨソの人に対してはそれは弱まり、時には全く消失する」。

- 15) そしてソトの人に対する敬語は、発話者はせいぜい自身の社会的評価を保証するような丁寧語の使用に限られるであろう。
- 16) 筆者の印象では、滝浦のウチとソトの関係は、日本語の指示詞のコ+ソの領域、すなわち融合型とアの領域の関係に近いように思われる (cf. 三好 1985: 19)。滝浦は聞き手の扱いが鍵であるとするが、その説明のための例文では「話し手」・「聞き手」に第三者の「動作主」がかかわっている。そもそも動作主が話し手のウチに含まれる者という前提で例文が提示されていて、その説明は筆者にとって難解である。
- 17) Cf. 中根 (1967: 46-54)。
- 18) この場合、敬意と結びつく解釈は無理であろう。ただ、「ほど」の追加によって女性が店主に数量の決定権を提供するというのであれば、そういう意味での丁寧さとは結びつくことになろう。
- 19) 現代日本語の敬語については、さまざまな解釈でその実態が解明されるであろうが、水谷 (2011: 84) の厳しい指摘も忘れてはならない。「現在のいわゆる敬語がおかしいのは、すべて責任回避から発しているということです。敬意からは発しておりません。自分に対して損が及ばないように、自分が責任を問われることがないようにという一点張りであるわけです」。また大野晋 (1999: 148-9) については、すでにどこかで指摘されているとは思われるが、気のついたことを1点指摘しておきたい。日本語の三人称の代名詞のところに、「話し手が自分の領域内の存在と扱う人は、コイツ・コヤツとコ系で表現し、すでに話題に出てきて、話し手も聞き手も知っている人は、ソイツ・ソヤツとソ系。話し手から遠い人は、アレ・アイツ・カレ・カノジョとア・カ系で表現する」とある。しかしソ系は話し相手にかかわるものを指し、ア・カ系は話し手・話し相手両者に共通認識があるものを指す(ダイクシスでは両者が知覚できるもの、アナフォラでは知識を共有するもの)。不思議なことであるが、なにかの誤解であろう (cf. 三好 1985)。
- 20) 野田は2012年9月に、国立国語研究所の所員として、「日本語の配慮表現の多様性」というタイトルのシンポジウムを開催した。通時的な時代区分にのっとってそれぞれの時代の配慮表現に関する研究結果が発表された。
- 21) このことについて、たとえばネウストプニー (2003: 24) は「言語行動は、社会文化行動が変わるにつれて変化する」と述べている。  
他方、三宅は中根の言う「場」のことに言及している (2011: 14)。「日本語話者は人や状況の『場』に自分を柔軟に合わせ、その場を作り上げたり盛り上げたりする。『場をうまく盛り上げる』こと自体が大切な仕事 (で：筆者) あり、自己の意思を通すことや自己表現することは、その場の中でこそ重要であると考えられる傾向がみられる」と述べている。しかしこの点は筆者の理解と相違する。筆者が理解する小集団の場(枠)とは、本項3.2.1.で紹介した河合隼雄の経験のように、できるだけ目立たないようにふるまうのが伝統的であったはずである。現代日本の社会では、グルビスモの特徴がどのように変化しているのか、「場」に何種類が存在するのか、筆者には不明である。
- 22) しかしながら筆者には「配慮」の概念を使って日本語を分析するために、つぎのような2点が明確にされるように期待するものである (筆者が不勉強によって、すでに明確にされている研究を見逃しているのなら、お教え願いたい)。

上記の注11でもふれたが、「配慮」という日本語の意味は「よく考えて心をくばること。心づかい」である。生田 (1997: 68) が提案する「配慮表現」の「配慮」は「対人配慮、つまり相手に対する配慮だけではない。話者自身の面子保持、さらに両者の関係維持に対する総合的な配慮が含まれている」という。配慮の相手は総合的であるとしよう。では、配慮の種類は具体的にどのようなものなのか。川村 (1991: 57-) は「相手の心の負担に対する配慮」を提案したし、姫野 (1992: 50) はそれを受けて、実質的な負担と精神的な負担を区別して別個の規則にすることを提案する。そして実質的

な負担のみを「負担」として、Leechの Tact Maximと Generosity Maximで処理し、日本語の処理のためには精神的な負担について新たに「思いやりの原則」(a. 他者の負債を最小限にせよ；b. 自己の負債を最大限にせよ)を設定することの必要性を説いている。そして山岡など(2010)には実に様々な「配慮」が設定されている。しかし日本語の配慮言語行動の配慮は全体としてどのような種類が設定されるのであろうか。それは体系的に設定されうるものなのであろうか。

また、その配慮の度合いを測るにはどのような尺度があるのだろうか。Leech(1983: 123)は Pragmatic scalesとして cost-benefit scale, optionality scale, indirectness scaleが挙げられている。これに類似する尺度は設定できるのであろうか。

他方、配慮言語行動には、筆者が和らげ表現の分析のために使っている日本社会の特徴的局面的のひとつである文化の均質性が前提になっているのではなかろうか、という点も指摘しておきたい。すなわち、配慮とは、発話者が話し手も自分と同じ社会生活上の常識を持っていると想定してなくては実行することができないであろう。

23) 本稿注8の鈴木と注9のフロイスを参照のこと。

### 参考文献

- 青木保(1999)『「日本文化論」の変容—戦後日本の文化とアイデンティティー—』中公文庫。  
 荒木博之(1990)『敬語のジャパノロジー』創拓社。  
 李御寧(1984)『「縮み」志向の日本人』講談社文庫。  
 生田少子(1997)「ポライトネスの理論」月刊言語, 1997年6月号, pp. 66-71。  
 宇佐美まゆみ(2003)「異文化接触とポライトネス」国語学, 第54号第3号, pp. 117-132。  
 宇佐美まゆみ(2008)「ポライトネス理論研究のフロンティア」社会言語科学, 第11巻第1号, pp. 4-22。  
 遠藤織枝(2012)『昭和が生んだ日本語』大修館書店。  
 大野晋(1999)『日本語練習帳』岩波新書。  
 金谷武洋(2002)『日本語に主語はいらない』講談社。  
 金谷武洋(2010)『日本語は敬語があって主語がない』光文社。  
 河合隼雄(2010)『ユング心理学と仏教』岩波現代文庫。  
 川村よし子(1991)「日本人の言語行動の特性」, 『日本語学』1991年6月号, pp. 51-60。  
 北原保雄(2002)『明鏡 国語辞典』大修館書店。  
 木村敏(1972)『人と人との間』弘文堂。  
 グライス, P. (1998)『論理と会話』勁草書房 (P. Grice (1989), *Essays in the Way of Words*, Harvard UP. の抄訳)。  
 国立国語研究所(2006)『言語行動における『配慮』の諸相』(国立国語研究所報告123), くろしお出版。  
 陣内正敬(2006)「「ほかし表現の二面性—近づかない配慮と近づく配慮—」, 国立国語研究所, pp. 115-131。  
 杉戸清樹など(2006)「『敬意表現』から『言語行動における配慮』へ」, 国立国語研究所, pp. 1-10。  
 鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』岩波新書。  
 鈴木孝夫(1975)『閉ざされた言語・日本語の世界』新潮選書。  
 鈴木孝夫(2009)『日本語教のすすめ』新潮新書。  
 高野陽太郎(2008)『「集団主義」という錯覚』新曜社。  
 滝浦真人(2005)『日本の敬語—ポライトネス理論からの再検討』大修館書店。  
 中島義道(1997)『「対話」のない社会』PHP研究所。  
 中根千枝(1967)『タテ社会の人間関係』講談社現代新書。  
 中根千枝(1978)『タテ社会の力学』講談社現代新書。  
 中山治(1988)『「ほかし」の心理』創元社。

- ネウストプニー, J.V. (2003) 「日本の言語行動の過去と未来」, 北原保雄 (監修) 『言語行動』 (朝倉日本語講座 9), 朝倉書店, pp. 1-28.
- 野田尚史ほか (2009) 「報告 第 23 回研究大会シンポジウム 配慮言語行動研究の新地平」, 『社会言語科学』 第 12 巻第 1 号, pp. 179-183.
- 野元菊雄 (2001) 「日本人の言語行動の特色」, 飛田良文 (編), pp. 103-127.
- 飛田良文 (編) (2001) 『日本語行動論』 (日本語教育学シリーズ 第 2 巻), おうふう。
- 姫野伴子 (1992) 「負担と利益」, 『埼玉大学紀要人文科学編』 41 巻, pp. 47-56.
- 平田オリザ (2012) 「インタビュー ひとりごと国会」, 『朝日新聞』 2012 年 7 月 5 日号 (朝刊, 13 面)。
- 広瀬幸生・長谷川葉子 (2010) 『日本語から見た日本人—主体性の言語学—』 開拓社。
- フロイス, ルイス (1991) 『ヨーロッパ文化と日本文化』 (岡田章雄訳注) 岩波文庫 (原典は 1585 年に島原半島の加津佐でまとめられた)。なお, 原典は 1946 年にマドリッドで発見されたが, 発見者のシュッテ師によって 1955 年に上智大学から出版された: Luis Frois S.J., *Kulturgegensätze Europa – Japan*, von Josef Franz Schütte S.J., 1955, Sophia Universität, Tōkyō。
- 水谷静夫 (2011) 『曲り角の日本語』 岩波新書。
- 水谷信子 (1993) 「「共話」から「対話」へ」, 『日本語学』 1993 年 4 月号, pp. 4-10.
- 三宅和子 (2011) 『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』 ひつじ書房。
- 三好準之助 (1985) 「スペイン語の指示詞と人称」, 日本イスパニヤ学会誌 『イスパニカ』 29 号, pp. 17-30.
- 三好準之助 (2012a) 「スペイン語の和らげ表現について」, 京都産業大学論集, 人文科学系列第 45 号, pp. 35-58.
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現—日本語語用論入門』, 明治書院。
- 養老孟司 (2003) 『見える日本, 見えない日本』 (養老孟司対談集), 清流出版。
- 養老孟司 (2004) 『生の科学, 死の科学』 (養老孟司対談集), 清流出版。
- 養老孟司 (2012) 『日本のリアル』, PHP 研究所 (岩村暢子との対談は pp. 15-54)。
- B&L Brown, Penelope & Stephen C. Levinson (1987), *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge University Press. 日本語版: 田中典子監訳 (2011) 『ポライトネス』 研究社。
- Beinhauer, Werner (1978), *El español coloquial*, Gredos, Madrid (titulo original: SPANISCHE UMGANGS-SPRACHE, Bonn, 1958).
- Benedict, R. (1989), *The Chrysanthemum and the Sword*, Turtle Publishing, Tokyo, etc. (初版, 1954 年)。  
日本語版: 長谷川松治訳 (1967) 『定訳 菊と刀 (全)』 社会思想社, 現代教養文庫。
- Caffi, Claudia (2006), *Mitigation*, Emerald Group Publishing Ltd., Bingley, UK.
- De Waal, Edmund (2010), *The Hare with Amber Eyes: A Hidden Inheritance*, Vintage Books, London.
- Escandell Vidal, M. Victoria (2011), “La Pragmática”, Capítulo 7 de Escandell Vidal, M. Victoria (coord.), *Invitación a la lingüística*, Editorial Universitaria Ramón Areces (UNED), Madrid.
- Grice, H. P. (1975), “Logic and conversation”, Cole & Morgan (eds.), *Syntax and Semantics*, Vol. 3: *Speech Acts*, New York, Academic Press, pp. 41-58.
- Leech, G. N. (1983), *Principles of Pragmatics*, Longman, London and New York. 日本語版: 池上義彦・河上誓作 (1987) 『語用論』 紀伊國屋書店。
- Little, W. et al. (1965), *The Shorter Oxford English Dictionary on Historical Principles*, Oxford University Press.
- Miyoshi, Jun-nosuke (2008), “La atenuación en la lengua japonesa”, en la revista *Investigación del CDCHT de la Universidad de Los Andes*, Mérida, Venezuela, No. 18, pp. 68-69.
- Miyoshi, Jun-nosuke (2012b), *La atenuación del japonés —un ensayo pragmalingüístico—*, Editorial Académica Española (LAP LAMBERT Academic Publishing GmbH & Co., Saarbrücken, Alemania).
- Nakane, Chie (1995), *Japanese Society*, Tuttle Company, Tokyo.

# On the Mitigation (Attenuation) of Japanese Language —Reflection on Our Essay—

Jun-nosuke MIYOSHI

## Contents

1. Contents of *La atenuación del japonés —un ensayo pragmalingüístico—*
  - 1.1. Chapter One (La atenuación lingüística)
  - 1.2. Chapter Two (¿Cómo es Japón?)
  - 1.3. Chapter Three (La atenuación japonesa)
2. The means of linguistic mitigation
  - 2.1. Bushes (matorales)
  - 2.2. Hedges (rodeos)
  - 2.3. Shields (amparos)
3. Verification of our arguments
  - 3.1. On the studies of linguistic politeness
    - 3.1.1. Universality of politeness theory
    - 3.1.2. Posture of speech-act
    - 3.1.3. Cooperation of speech-act
  - 3.2. Mitigation and aspects of social structure
    - 3.2.1. On the Nakane's theory
    - 3.2.2. Alocentrism
    - 3.2.3. *Uchi* and *Soto*
  - 3.3. Politeness studies on Japanese
    - 3.3.1. *Hairyō* expressions
    - 3.3.2. Some studies on the mitigation
    - 3.3.3. Linguistic polite behavior and the mitigation
4. Next steps of our investigation
- Notes
- Bibliography

**Keywords:** pragmatics, politeness, mitigation, Japanese, linguistic polite behavior